

物語と史蹟をたずねて

土橋治重著

成美堂出版

呂宋助左衛門



呂宋助左衛門

物語と史蹟をたずねて

土橋治重著

成美堂出版

呂宋助左衛門◆物語と史蹟をたずねて

著者◆土橋治重

定価◆八〇〇円

初版発行◆昭和五二年 九月 一日

発行者◆深見兵吉

本文印刷◆福音印刷株式会社

カバー印刷◆名古美術印刷株式会社

発行所◆成美堂出版株式会社

東京都文京区関口一丁目三二ノ四

電話◆東京二〇二一〇六九七

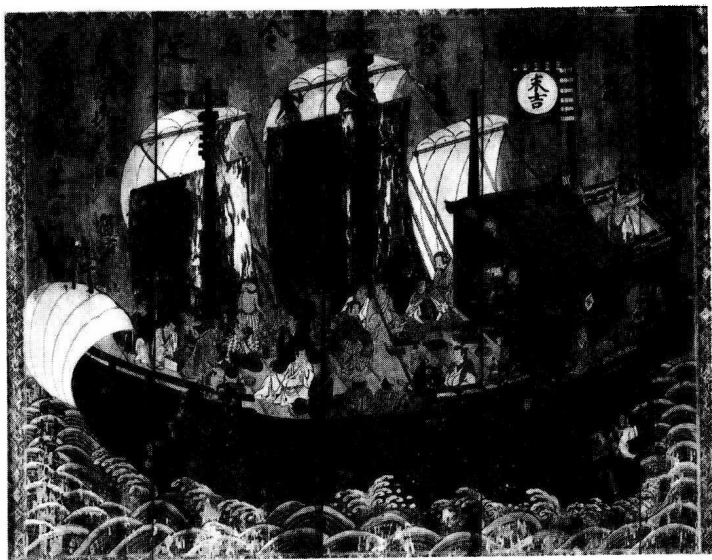
振替◆東京七一四四六六

郵便番号◆一一二

落丁・乱丁本はお取り替えます

目

次



御朱印船・末吉船（清水寺の絵馬のうち）

★は〈史蹟探訪〉を、☆は〈スポット〉を示す。

われらは堺の会合衆なり 9

☆自治都市・堺14 ☆会合衆14

多聞山城への使者 15

★多聞山城21 ☆堺商人21

弾正久秀という男 22

☆信長と石山本願寺28 ☆久秀の大仏殿焼き討ち28

自治都市の終焉 29

★鉄砲屋敷跡36 ☆土居川公園36

☆自治都市・堺の自衛36

海からの土産 37

★旧堺港43 ☆鉄砲の伝来と発達43

☆助左衛門の出自と若き日44

☆海外貿易44

忍者と忍者 45

★信貴山城50 ☆信長の安土茶会50

突然の変事 51

★二条城 57

★岐阜城 57

☆姉川の戦い 57

☆三方が原の戦い 57

黄色い毛の女 58

☆青い目が見た信長 62

神の使徒たち 63

★ザビエル公園 68

☆堺とキリスト教 68

悪運の強い男 69

宗久と助左衛門 75

☆堺大小路通り 80

人ころがしの名人 81

☆鉄砲の製造と供給 89

満つれば欠くるならい 90

★助左衛門の邸宅（遺構） 96

☆鶴と松の絵の伝説 97

忘れない約束 98

★安土城 103

キリシタン医師	104
★南蛮寺	109
☆堺の寺	110
こちらのほうが血が濃い	111
★江尻城	116
☆曾呂利新左衛門説話	116
信長・光秀・秀吉	117
★本能寺	121
☆堺の奉行	121
出世組と非出世組	122
★秀吉の大坂城	128
★南宗寺	128
人が変わった藤吉郎	129
☆秀吉と利久	135
聖書を訳す宣教師	136
☆秀吉の禁教	141
☆堺・平戸・長崎	142
伴天連医師昇天	143
★粟田口	148
牛肉を食う秀吉	149

☆南蛮服装の流行155

☆肉食について155

利久自刃

.....155

☆利久の茶道161

☆利久自刃の諸説161

★大徳寺162

呂宋渡航

.....163

☆ルソン島169

☆淡水169

☆琉球169

☆手紙に見る“恐日”170

☆日本人の南方進出170

イスパニアと日本人の戦闘

.....171

☆カガヤン河口付近175

☆マニラの日本人175

マニラ城を乗っ取る

.....176

☆マニラ市184

☆シヤムとアンナンの日本人町184

東埔寨の女

.....185

☆カンボジア日本人記190

呂宋の壺

.....191

★大坂城西の丸197

☆ルソンの壺197

日本脱出 198

★大安寺 204

★佐和山城 204

☆大安寺之記 204

その後の助左衛門 205

★佐賀城 208

☆ぼけた秀吉 208

☆助左衛門毒殺伝説 209

☆反体制の男 209

呂宋助左衛門年表 210

おもな登場人物 216

あとがき 221

■写真

フイリピン政府観光局

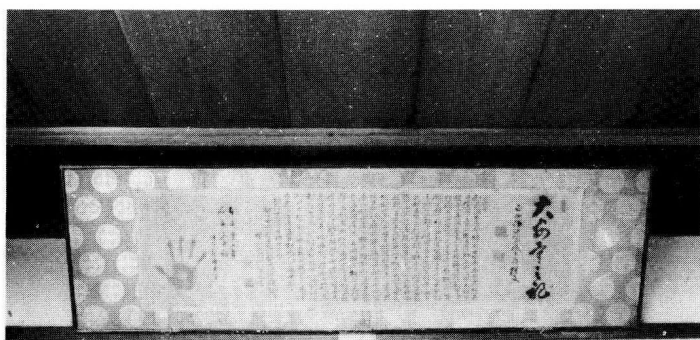
■装丁 山崎登

日本交通公社

西村元賢

編集部

呂宋助左衛門



大安寺之記

われらは堺の会合衆なり

永禄十一年（一五六八）秋、織田信長は尾張、美濃の軍勢をひきい、放浪の御曹子足利義昭をともなつて上京した。

そして、たちまち、京、大坂付近、大和などを征服すると、和泉の堺に二万貫の矢銭（軍用金）をかけたきたのである。

義昭を足利將軍の座につけた信長は、瞬時ともいえる間に、實際上の主権者にのしあがった。義昭は口ボットである。

信長がこういう主権者の位置を獲得したのは、天下制覇を狙う戦国武將たちにとって、たしかに、晴

天の霹靂に類するものであった。

また、堺にとつても、矢銭をかけてきたのは、まったくの寝耳に水であり、とんでもない強奪的行為、成り上がり武將の思いあがりであつて、なんとしても許せないことだった。

堺の町は、このころ明および南蛮貿易によって、異常なほど栄え、会合衆といわれる三十六人の富裕な町人たちによって治められていた。

町のまわりには濠をめぐらし、常時数百人の浪人を雇い、町ぐるみの財力と武力を誇っていたのだ。会合衆がその氣になれば、財力にものをいわせて、いつでも数千の兵を集めることができるのである。

ふつうの戦国大名では齒がたたない。だから、町の人びとも会合衆も、自信と誇りをもっていた。ことに会合衆のなかには、じぶんで明や南洋方面に出かける氣宇闊達なものも多かったので、この衆の自信は強く、自尊心は高かった。

尾張の成り上がりの小大名が、二万貫よこせとは、牛車に向かう蟪蛄（かまきり）の斧のようなもんじ

や！

たしかに、かまきりの斧であるにちがいなく、そして、それはとくに会合衆にとっては許せないことであつたが、しかし反面、京都を中心に近畿の中央部を占領した信長の勢力はなみなみならぬものであり、また、長い間堺の代官（のちには領主）だつた大和多聞山城の松永弾正久秀が、いち早く信長に屈してしまつたことが、彼らにかなり強い不安を与えた。松永久秀は、幕府の管領にのしあがつた三好筑前守長慶の臣だつたが、長慶を悶死させ、將軍足利義輝を討ちとり、奈良東大寺の大仏殿を焼き、近畿の中央部に勢力を張つた。久秀は天文の終わりのころより堺の代官だつた関係から、堺を特別にあつかひ、会合衆の自治をおかそうとはしなかつた。それどころか、悪逆の行爲をする一方、風流をたしなんだ久秀は、会合衆のおもな人たちと茶の友としてつきあい、とくに頭株の能登屋、膳脂屋とはつきあいが深かつた。

その久秀が、一発の鉄砲も撃たずにいち早く信長

に屈し、ただ大和一国だけの領有を許されて、多聞山城に逼塞してしまつたのだ。

弾正様はどのお人が、悪しざまのことをなされてやつと手に入れた、京、大坂の諸国を手放されたのは、信長を容易ならぬ男と見通されてのことにちがいあるまい。

そう会合衆たちはいちように思ったが、矢銭の要求に應ずることは、応仁の乱後、百年近くも町を無類に繁榮させ、数十年間、自治制をつづけてきた彼らの、歴史的ともいうべき、その自尊心が許容しないのだ。

どうするか。

この年（永祿十一年＝一五六八）の十一月はじめの一日、会合衆たちは堺北町の經堂で、緊急相談会を開いた。ここは彼らの会所であり、いまの市役所と商工会議所をいっしょにしたようなものである。のちにこの經堂は惣会所となつて、南町に移つた。

堺の町にとっての未曾有な事件である。会合衆はみな緊張して参集した。能登屋、膳脂屋、万代屋、

堺の町にのこる旧家



坂本屋、木屋、住吉屋、小西隆佐、小西一党、納屋
助左衛門、納屋一党、のちに有名になった今井宗久、
津田宗及ほかの豪商連が顔をそろえた。

「さて、みな衆の耳にはむろんはいり、町中の騒
ぎにもなっている、矢銭二万貫のことで、お集まり
を願ったわけだが、腹藏ないご意見を聞かせていた
だきたい」

と、まず、能登屋平久が口をきった。

それまで私語しあっていた座中には、沈黙がみな
ぎった。

能登屋はつづけて、信長の使者として右筆で渉外
係を兼ねている松井友閑がきたことを告げ、早急に
堺としての態度を決めなければならぬといった。

彼はもう六十歳に近く、ゆったりと落ちついてい
て、人品にもことばにも堺筆頭人としての風格があ
った。頭髪はすっかりはげている。

が、堺の態度といったことから、座中の沈黙は破
れ、激語が飛び交い、ことばとことばが衝突して、
なにをいっているのかわからない状態になった。

激昂^{げつこ}している会合衆の心中が露呈されたのだ。しかし、それらの声々は一括すると、信長を罵^{のの}り、堺衆の自負をしめし、矢銭の抛出も断わって、大ぜいの浪人を集めて町ぐるみの抵抗をする、ということだった。

「信長ずれが」

「成り上がり者が」

という声々も、まるでアクセントのように、いちだんと高くまじっていた。

「まあ、お静かに、ご一統!」

能登屋平久は、こんどはご一統といい、静かに手をあげて制した。

「われらは堺の会合衆でありますぞ。なら、分別をもって、話し合いまししょう」

能登屋にそういわれると、赤面したように一座は静まった。

会合衆たちは、会合で、いままでこれほど激昂したことはなかった。

「一人一人、意見をいい、多いほうに決めるといた

そうではありませぬか」

そういったのは、能登屋の隣にいた膳脂屋惣兵衛^{うちべゑ}だった。彼も能登屋と同じくらいの年配だ。

会合衆たちは惣兵衛の発言に従って、一人ずつ意見をいった。大部分が、拒否して即座に町ぐるみの戦闘態勢をとる、という意見だったが、小西一統と納屋一統のうちの三、四人が、

「矢銭二万貫くらいは、堺としてはたいした金額ではありませぬ。ここはこらえて、ひとまず渡してやり、信長の出方を見てはいかかなものでしょうかな」という意味のことを主張した。

そして、今井宗久一人が発言を棄権した。

「宗久殿はなぜ、意見をいわなかったのかな?」

膳脂屋惣兵衛がたずねた。

「わたしは」

といって、今井宗久は考える顔をした。

「京につて、がありまして、信長のようすをよく聞きました、どうもこれは手ごわい、と思ひまして、万一を考え、信長によしみを通じておきました。つ

まり、わたしは「松島の茶壺」とそれに似合いの茶碗などを、信長におくったのでございます」

かすかなどよめきが座中からおこった。

「だが、これは和戦両様の構え……わたしは痩せても枯れても堺の会合衆の一人に変わりはありませんぬ」

宗久はきりっとした目つきをした。

その目には一瞬鋭さが光り、知恵が宿っていた。

宗久も五十歳近くなっていて、髪が白い。

会合衆は一時は激昂したが、やはり、かしこかった。堺の繁栄を維持しているのは、一つには彼らのものごとへの理解力である。

宗久の行為も理の当然としてのみこんだ。矢銭の拒否、軍事行動が逆目になった場合、相手と交渉の窓口がなければ進退に窮するわけだ。

相談は結局、矢銭の抛出は考慮中ということにして、すぐ防戦の準備をととのえ、同じように矢銭を命じられた摂津の石山本願寺および平野郷に共同防衛を申し入れ、信長軍と戦って敗退した三好三人衆

（三好日向守長逸、岩城主税助友通、三好下野守政康）と連絡をとり、多聞山城に逼塞した松永久秀に協力をとめることになった。そして、それぞれの分担を決めた。

総指揮には能登屋平久があたり、その下に参謀部のようなものを設けて、中枢の機関とすることにした。

「さて、みな衆、これで手だてがすみ申した。みな力を合わせて、よろしくおたのみしますぞ」

と能登屋はいった。

「いうまでもありませんぬ」

「さあ、はじめましょうぞ」

「これから、おもしろくなりましょう」

会合衆たちは、話が決まるとすっかり落ちつき、口ぐちにそういって、まるで商売にかかるように張りきって席を立った。

そこには、伝統的な協力のならわしと、なみの商人などにはない気宇の大きさがあった。

自治都市・堺

堺は王朝時代から塩湯浴の場所として名高かつたが、中世にはいって市場として発展した。これを住民たちが、領主たちに毎年一定の年貢を納める「地下請」としたことから自治制が発展し、会合衆たちの合意によって治める「自由都市」が生まれた。戦国時代の初期、遣明船の発着地となり、近畿の経済的中心地として異常に発達したことが自治を強化し、強力な武力も常備させた。『耶穌会士日本通信』にはこうある。

へ日本全国当堺の町より安全なる所なく、他の諸国において動乱あるも、この町にはかつてなく、敗者も勝者もこの町に來住すればみな平和に生活し、諸人相和し、他人に害をくわうる者なし。市街においてはかつて紛擾起ることなく、敵味方の差別なくみな大なる愛情と礼儀をもって応対せり。市街にはことごとく門(木戸)ありて番人を付し、紛擾あればただちにこれを閉ずることも一の理由なるべし。(中略)町はなほだ堅固にして、四方は海をもつて、また他の側は深き堀をもつて囲まれ、つねに水充滿せり(『日本の歴史』第12卷中央公論社)

会合衆

自治都市・堺は会合衆によって運営された。この衆はみな豪商、富商であり、はじめは十人だったが、のちには三十六人になった。

これらの人びとは三人ずつで十二カ月を輪番でつとめた。『耶穌会士日本通信』でも「ベニス(イタリア)のごとく執政官によって治めらる」といっているが、この執政官は会合衆たちであった。堺のこのような組織は他の港町でも参考にし、出羽の酒田、若狭の敦賀、筑前の博多にも生まれたというが、それは堺のように自治制をとったものではなかった。この会合衆が戦国乱世のなかでどんな実力を持っていたかを示す一例がある。

天文十五年(一五四六)、足利幕府の重臣、細川氏綱は將軍義晴を擁して反対派の三好長慶、細川晴元を討とうとし、大兵をあげて彼らに迫った。長慶、晴元は堺に逃げこみ、会合衆をたよった。会合衆は調停に乗り出して和議をまとめ、長慶、晴元はことなきをえたのだった。この衆には消長も、メンバーの入れ替えもあったが、豪商として諸史料に見える人たちはみな会合衆だったと思われる。著名なのは能登屋、膳脂屋、天王寺屋、納屋、住吉屋、万代屋、和泉屋などである。